

## 海外の話題

# 日本人の足跡

農林中央金庫 シンガポール支店長 栗 原 晃

先日シンガポールの日本人墓地を訪ねて来た。今年、ある社長さんと食事をする機会があり、彼にとっては3度目のシンガポールで土地のことに詳しいので、いろいろ伺っていたときのことである。「今回も日本人墓地にお参りして来ました。やはり日本人であるからには行かないとね・・・。」それを聞いて、そんなことは思いもよらなかった私は心の中で恥じ入った次第である。

シンガポールは日本から近いせいか、この地で亡くなった日本人も多い。古いところでは二葉亭四迷。彼は赴任先のロシアから帰国する船上で亡くなり、この地で茶毘に付されたそう。正確には彼の遺骨は日本に帰国したそうだが、この墓地には軍人、市民など様々な人々が眠っていて、その中には「からゆきさん」も含まれる。彼女たちがどのような思いで生きていたかを知る術はないが、「精霊菩提」とだけ刻まれた小さな墓石の群れを見ていると、今よりもずっと遠かった異国の地でさぞや苦勞しただろうと思わずにはいられない。

くだんの社長さんはとても物知りで、たとえば“どこそこのデパートがある場所が昔は墓地だったので、そこの地下道には霊がたくさん見える”とか、“あのホテルの場所は昔、「からゆきさん」がいたところなので、見る人が見れば部屋の中に「からゆきさん」が住んでいる”とか教えてくださったが、靈感の乏しい私には幸いにして全くなにも見えない。社長さん曰く「いや、彼女たちも家族のためにここまで来たのだから決して恨んでいるばかりでもないですよ」と、まるで「からゆき霊」と話をしたことでもありそうな口振り、いや、もしかしたら本当にそうなのかもしれないと思ったものだ。

このように数多くの日本人が足跡を残しているわけだが、日本人として肩身の狭い思いをする足跡が「日本軍のシンガポール占領」だ。山下中将の「イエスかノーか」の台詞が有名だが、これを再現した蠟人形がセントーサ島にある。その隣には日本軍降伏のシーンも再現されていて複雑な気分になるが、施設内で見つけたある展示には目を見張った。それは日本という「シンガポール陥落」直後のことだそうだが、日本軍が「良民登録のための検証」と称して華人を集め、その中から「抗日分子」とみなされる人々を虐殺したといわれる「華人虐殺\*」の展示である。目を背けるような

\* “虐殺”の事実については異論もあるようです

展示物はないものの日本人としてはいたたまれない。さらに驚かされたのは展示の最後に大パネルで原爆投下直後の広島の写真が展示され、犠牲者の数をはじめ被害の詳細が説明されていることである。その展示には、単純な復讐心に振り回されず「アジアの人々にとっての“戦争という災厄”を訴えよう」という意図が感じられ、この国の「品格」をうかがわせる。あるシンガポール人は「品格」を「dignity」と訳したが、我々日本人も威厳を持って、アジアにおける戦争の当事者であったことを伝えてゆくべきだと思う。

私自身、縁あってこの地に住み、無名のあしあとを残す日本人の一人となったが、こうしたことを念頭におくべし、と痛感した次第である。